

心赴くまま 自分を出せた

演劇や美術 少しずつ自信つける

不登校
居場所を
探して

学校に通えない。教室になじめずつら。そんな子供たちが、芸術活動を通じて自分の内面を表現したり、コミュニケーションのスキルを育みながらできる居場所が神戸市にある。活動によって自信を上げた子供たちは、学校に復帰したり、やりたいことにチャレンジしたりと、次のステップへと進んでいる。

(藤井沙織)

舞台でいきいき

「15歳の頭からいきます」「はーい」。10月31日、神戸市内で演劇サークル「ティーンエージャー・フリー」シアター(T.F.T)の稽古が行われた。所属するのは不登校や学校に行きつらさを感じる子供たち。15、13歳の上履向け、喜びや不安、戸惑いなどをさまざまな感情をトリフに乗せて演じた。

T.F.Tは15年前、演劇部の顧問経験のある元中学校教師が、教室で描いていた生徒が舞台でいきいきする姿に「演劇の力」を感じて立ち上げた。参加対象は小学5~7、高校3年生、これまで舞台に立ったのは80人超。代表を務める丹波聡子さん(50)は「本当は学



校で皆を動かしけれど、友達をつくりにくい。自分を出すのが怖いという子供が多い。話す。演劇を通してやりたいことを挑戦する力、社会と関わる積極性を育むのが活動のねらいで、演じるキャラクターは台本がない状態で子供たちが自由に決めてもらう。ゲームの登場人物に仮装、殺球、天才花火師、「やりたい自分」を決めた声になりきって即興演劇を繰り返して、そこで生まれたトリフからスタッフが台本を作り上げる。

この即興演劇がコミュニケーションの練習になる。どうすれば絵話がのびるか、相手の話を引き出さるか。井筒さんは「スタッフも参加するが、その下手さがこころでは

12月の上演には、練習に励む演劇サークル「T.F.T」の参加者も神戸市内
失敗しても大丈夫、という勇気になる」と笑う。同敷からとうまく話せず苦悶したという参加5年目の高校1年の男子生徒(15)は「少しづつと気軽に話せるようになり、友達も増えてきた。学校の先生に朗読をほめられた。自信もついた。昨年から参加する高校2年の男子生徒(17)は「T.F.Tでの楽しみがあるから、前向きに毎日を通わせる」と話す。

受け入れられる

神戸市西区のアトリエ「色彩楽園」にも、不登校や学校を休みがちな子供が複数入居。絵画教室のような課題はなく、子供たちは色鉛筆や絵の具、色紙や空き箱などアトリエにある素材を自由に使い、心の赴くままに作品をつくる。

「作品はいわば自分の分身。表に出ない感情や欲が内包されている」と話す。例えゲームはか
りし無気力そうに見える不登校の子供が描いた作品のモチーフや色使いをみながら、「現状から脱却したい」という葛藤がみえることも、そうした心状は保護者とも共有する。
大切なほんのりな作品も受容し、大切に扱うこと。不登校の子供の多くは強い不安を抱える。受け入れられることで不安が、アスガ整」と藤井さん、次第に意欲もわき、やりたいことが見つかり、学校生活を楽しめるようになったという。小学4年の長女が通う神戸市の女性(15)は「作品が認められることが自信に定にながめられている。これほどな願望」とが増えた」と娘の変化を語る。
不登校の子供の支援に取り組んできた神戸学院大の水野浩教授(臨床心理学)は「学校で自分らしくいられない子供は、自分を表現し、受け入れられる場所が必要」と強調。「演劇やアート以外にも、スポーツやダンス、楽器の演奏、プログラムを作ることも自己表現、エネルギーをためて通えるようにする子供もいる」と話した。



不登校の子供の作品
(色彩楽園提供)

「不登校」に関する皆さんの情報やご意見を、ご感想を募集します

住所、氏名、年齢、性別、電話番号を明記していただき、郵送の場合は〒556-8661(住所不要)産経新聞大阪社会部「不登校取材メール」、FAXは06-6633-9740、メールはfutookou@sankei.co.jpまでお送りください。